View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by DWCLA Academic Repository

アメリカン・ボード宣教師文書

――同志社女学校女性宣教師を中心として――

〈スタークウェザー書簡―訳および註―〉（８）

坂　本　清　音　監訳
秋　山　恭　子
吉　岡　弘　子
小　林　弘　美

書簡翻訳続き

〈235/1〉【秋山恭子 訳】

日本の京都にて、1882年２月４日、クラーク博士宛

〈最近の京都ホームの様子〉

拝啓

ひと言、私たちの仕事の様子をお伝えします。この前の手紙以来、パーミリーは悪性の吹き出物・癰でずっと臥っています。そのためすっかり弱っていますし、その吹き出物自体がまちがいなく疲労の現れだと医者は言っています。さしあたり回復に向かつていますが、まだ部屋に閉じこもったままです。もちろん学校は、彼女が少しずつ仕事量を減らさざるを得なくなっている間は、痛手を被っています。パーミリーはしっかりした強い心を持ち続け、宣教師としての立派な精神を兼ね備えていますので、力以上に働いてきました。昨日アンナ・Y・デイヴィスが着任してくれ、来週の月曜日からパーミリーに代わって伝道の仕事を開始することになり、とても嬉しく満足しています。どれだけ彼女を必要としていたか、言い表せないほど感謝の気持ちで

一杯です。彼女の天性と、その後に培われたクリスチャン的性格の中には周囲の人たちにその有能さを役立て、良い関係を育む見込みが大いにあります。パーミリーも少しずつですが、A. Y. デイヴィスに助言を与えることが出来るでしょうし、いずれにしろ、すっかり快くなるまでは、デイヴィスが続けて慰めや励ましの救いの手を差し伸べることが出来るのを望んでおります。善良な伝道師としての生活を一年、一年積み重ねることにより、その経験がいかに役立つかを痛切に感じています。

〈「宣教師」の資格と「教師」について〉

今さら新しいことを言いたいとは思いません。ただ新しい経験を積むにつれて、古くからの理論が正しかったという証拠がますます加わるだけなのですが、ここで、女性宣教師の重要な資格について、二三書き留めさせて下さい。決して「私自身がすでに完璧」と言っているわけではありませんが。

ところで私は、「教師」と「宣教師」の相違を認めたくありません。宣教師として来日するのにふさわしい人が、教えることに特別な能力を有する人ということもあるでしょう。教えることを通して、キリストの力を実例で示すのは必要なことでもあるのです。でも、世界のキリスト教国でないどこを見ても、日本ほど「良い教師」が得やすい所は他にないでしょう。宣教師が来なくても、日本人は決して憐れな無学の状態には置かれなかったでしょう。それゆえ、神様から特別に授かった賜物が宣教師のどんな働きで生かされたとしても、宣教師は先ず第一に、高い理想的なクリスチャン的性格を持っていなければなりません（そのような理想を備えている人は、私がかつて想像していたほど多くはないのですが）。教師、医師であって、そしてクリスチャンというのではなく、何にもまして先ず「クリスチャン」であることが大切なのです。そこに雲泥の差がありますし、［日本のような］地の果て［の国］に行けば、その差が最も明らかに現れるのではないでしょうか。

〈女性宣教師に必須の６条件〉

1. 第一の条件は、熱心で愛に満ちたキリスト教的気質の人。それに少々の試練と、神様から与えられた苦悩をくぐり抜けて来た経験のある人。
2. 女性宣教師は、生涯独身生活を貫く気持ちと、その能力を十分に心得るにふさわしい年齢であるべきです。本国を出発する際に誓いを立てよ、などとは言いません。かといって、その問題を慎重に考慮しない人は来るべきではありません。神様から任じられたライフ・ワークの道に献身的な愛情を持ち勇敢に入って行く人は、ずっと役に立ちかつ幸せであり、周りの人を困らせることも少ないでしょう。（もし本国の善意に富む皆さまが、女性宣教師を待ちうけている働きと愛の生活に対する喜びと特権を高く評価して下さり、送り出す時には葬式のようにではなく、また最後に慰めの言葉として、来世での復活や結婚の可能性を述べて下さるのでなければ、見送りはもっと素晴らしいものになるでしょう。その時には楽しい笑い声が生じるかもしれませんが、そのような見送りは本人のためにもなりませんし、生涯を神様に捧げた独身女性を緊急に必要としている大義には役立つものでもありません。）奇妙に思えるかもしれませんが、私が思い違いをしていなければ、言葉の習得を含めて、通例、最も良き働きをしてきた人は、現場に着任したとき一番の年長者でした。

　自分の健康に関する無知や軽視、あるいは誤った方向に進んで夢中になる。新しい場面に出くわす毎に自分しか頼る人がいないと分かったとき、意識してないかもしれないが極度に緊張する。これら全ての事柄が合わさると、若者の方が、言葉の習得などでは有利であるという考えを覆すことになります。個人的な例で恐縮ですが、私が日本へ来た時は26才で「最年少の宣教師として送り出されました」。その時、年のわりには成熟しているとよく言われましたが、振り返りますと、準備万全とは申しませんが、一日でも早く来ていたらどうだったか分かりません。「測り縄は麗しい地を示し、わたしは輝かしい嗣業を受け」[1]継いだので

すが、たとえ一年でも少ない経験と試練で来日し、あらゆることに応じようとしていたら、死んでいたに違いないと思います。

3. 女性宣教師は健康であり、かつ健康の維持が必要という強い気持ちを持っていなければなりません。健康状態を気に掛けるのは恥じることではないのです。日本で生活するには、規則正しく運動する時間を確保することが必要です。外国人は気候に順応するよう努めなければなりません。日本人は、私たちが暮らしているような洋館の密閉された暖房付きの部屋に閉じ込められれば、数年で絶滅すると思います。日本では、気持ちをリフレシュさせる戸外のピリッとした快適な空気は望めないことを外国人は覚えていなければなりません。若い時に日本へ来て、失望して帰国した人の話によると、宣教師の健康管理に気を配り、尋ねてくれる人は誰もいなかったそうです。
4. 日本で教える場合、本国で「厳しい先生」として得た名誉の全ては仕舞い込む方がいいでしょう。ここ日本では「厳しさ」はそれほど要求されませんし、日本人と付き合って5年に満たない人には、厳格さは手中の鋭い刃となりかねないのです。
5. 他人と協力して働く能力、そしてキリストやキリスト教の信者と共に働く義務と特権を自覚することは大事です。本国の至る所、東海岸からゴールデンゲートに至るまでの親切な友人から「あなたの仕事」とか「あなたの学校」などと励まされると、それは、意識しなくても大きな害を与えます。当然と思われるかもしれませんが、同時にしばしば致命的になるのです。一寸、考えてみて下さい。ただ一人で外国人の宣教師として働くことになる仕事を任されるのは、わずか千人中一人でしょう。たとえ他の宣教師の労働の果実を刈り取るために呼ばれたのではないとしても、多くの、ほとんどの宣教師は他の宣教師と協力して働くために招かれているのです。臨終の時に、その日に知ろうとすればですが、初めて個々の宣教師がどれだけ寄与したかが明らかになるのです。ああ、

宣教師の人生とは、そのようにして仕事を全うするならば、無心の境地にたどり着ける最高の生涯を送ることになるでしょう。

6. 是非ともボードは、新任者に海の向こうのアメリカの岸で、任地日本での仕事を、おおよそにしろ特定することは不可能なことと理解させて下さい。もし、新任者が種々の困難を理解し、そして様々な賜物をもって「何処にいても、イエス様といっしょなら」私は喜んで働きます、イエス様が望まれるように私を用いてくださいと感じられる人なら、ここがまさに「平安」と「日光」の射す土地だと発見し、イエス様の授けて下さる王冠のための星を勝ち取るようになるかもしれません。ああ、私たちのために祈って下さい。特に今、日本人は、私たちの中にある救い主、キリストを知る必要があります。A. Y. デイヴィスが神戸から来てくれたので、これからは希望を持って、心から心へと直接に伝わるクリスチャンの感化を行使する機会を待ち望むことが出来るでしょう。ああ、すぐにも徹底的に心に染み入る働きをしなければなりません。私は苦しい思いと共にますます確信するのですが、キリスト教を嫌う人が根っこのない文明の花に飛び付くのと同様に、自信と自惚れを持っている日本人の誘惑は、キリスト教の花に飛び付くことです。プライドも高いので、洗礼までによほど丁寧に教えないと、その後の進歩が遅いのです。なぜかというと、受洗を完璧のしるしと考えて、洗礼を受けた後で注意されると彼らは腹を立てるからです。

〈在学生の現状〉

現在、学校には信者が11人と洗礼志願者８人が在籍しています。これら８人中、誰かが突然召されたとしてもその人は救われると信じますが、最近起った難しい実例をみますと、日本女性の灯台となるはずのこの女学校において、まだまだ高い基準のモラルが必要なことが分かります。実は驚いたのですが、ある洗礼志願者が、最近京都出身の年上の女生徒を組織的に苛めた

り不親切に扱っている仲間のリーダーであることが判明しました。全ての兆候から、連中はその女生徒の才能や優秀さを妬んでいたようです。幸いこの苛めは事前に察知されましたので、もちろん、リーダーの女生徒の洗礼は取りやめになりました。そうでなかったら、新入生は永遠に信仰から離れることになっていたでしょうに。

ところで話は変わりますが、この事件をきっかけに、これまで「京都人」とか公立の女学校［女紅場］の校風を軽蔑して悪口を言う人が多かったのですが、一寸弁護させて頂きます。この苛めを受けた女生徒は、実に穏和な性格で、仕草も女らしい模範生です。彼女とお付き合いを続けていると、その人の謙虚さは本物で、京都ホームの優秀な生徒と比べても見劣りはしないことが分かります。私が唯一恐れているのは、その生徒がここ女学校で、彼女の長所全てを失うことです。そうです、そして今してくれているように、自由に私の部屋に来て、抱えている悩みを相談してくれなくなって、不誠実で隠しごとをするようになるかも、ということなのです。（その苛めのリーダーは、実は最近亡くなった指導的な立場のクリスチャンの男性の妹[2]で、およそそのようなことはしそうにない生徒でした。）

〈4年間耐えて来た「内輪もめ」の暴露〉

しかし、何故キリスト教の学校で女生徒たちは多くのものを失い、隠し立てをするようになるの、とお尋ねになるでしょうね？　それは、どの家にも押入れには幽霊が居るからなのでしょうか？[3]　その質問にお答えするからには、京都ホームに出没する幽霊のことを、きちんと述べなければなりません。すなわち、今、体験しているうんざりするような対立と精神的苦痛の唯一の源のことなのですが、それを以前の政府の反対[4]と比べるならば、以前の苦痛は「鎮痛剤」のようなものです。一言で言えば、その苦痛とは、新島夫人とその母親（寮母）[5]の間で決められた不文律なのです。

母親は72歳ぐらいで、とても活動的な人です。そして母娘は「この家の屋

根の下」では、あらゆる出来事は全て、外国人の女性教師には知らせないと、決めているのです。以前、あなた様にこの出来事を述べた時は、仕方なくでしたが、今はもっと不承不承にお話します。私はこの4年間ただただ辛抱強く我慢して暮らしてきました。その間の一部を共にしたパーミリーも、祈りながら希望を持ち続けその苦痛に耐えて来ました。しかしその苦労は克服されるどころか、時折起る騒動から、その決まりが二人の決めた行動方針であることがはっきりと分かるのです。

学校の中では感謝することは多いのですが、この組織の下で私たちはここに居て、最重要な仕事をする邪魔立てをされています。言うならば、私たちがここにいるただ一つの仕事に対しての邪魔立てです。女学校設立に祈りをもって捧げて下さった本国の人々の寄付金と働きの正当な果実のまるまる4分の3が、有害な影響をもたらす勢力のおかげで無駄になると思うと嘆かわしいのです。生徒全員は、特別な例外を除くと、最初は私たちの教育方針に従います。しかし、何か確定的な合図が送られたと思うとすぐに、無邪気で人を疑わない素直な心を失います。次第にホームの中は不快な雰囲気に包まれます。正当な目的で私たちの所に頻繁に来る生徒は、目星を付けられ徐々に避けられる様になるのです。その後、教師と生徒の両方共が「犯罪人」と言わないまでも、過ちを犯しているとみなされ、そのように扱われるのです。当然、宣教師が何を言おうが、何をしようが、その感化力は大いに弱められます。

〈これまでの新島八重・山本佐久との関係〉

この事態をあなた様にご報告するのに、どれほど苦しい思いをしているかは言葉に表せません。本当は、新島夫人と母親の両方とも心から好きなのです。新島夫人が初めてキリスト教を学んだのは30歳の頃でした。その時すでに彼女の非キリスト教的な考えはしっかりと根付いていたに違いありません。幼少の時から、士族という身分を自覚し、羨望・嫉妬・疑惑・諍いの蔓延し

ている日本の学校で長い間教育を受けているのですから。あなた様の監督下にある、真実と愛の灯台であるべき女学校において、キリスト教の紳士であるあなた様がこのように低俗な水準で絶えず判断され、このような決まりが知らない内に教え込まれているという状況を想像することがお出来になりますか？「ああ、神様、一体、いつまでこの苦しみが続くのでしょうか。」[6]

〈日本の社会における女性の地位〉

私たちは、出来るだけ迅速に生徒を完全なクリスチャンにするための、待ったなしの必要を痛感しております。日本では、女性は力を持っています。新島氏でさえも、妻や女性縁者が持つ卑しい考えに少なからず影響されて偏見を抱きます。将来の偉大な希望であり、ライオンを退治するほどの大胆な勇気が有りそうな若者たちが、女性の影響下にあって柳の様に身をかがめ屈しています。キリスト教は若者たちに、女性に敬意を払い妻を大切にするようにと教えます。言うまでもないことですが、今日この堕落した日本（海外では、日本の「文化」は称えられるのですが）で、最悪の意味において、女性が支配しているのです。「クリスチャン」の若者たちは、この日本特有の罪には嫌悪の情を抱くのですが、当然のようにかよわい女性、いやむしろ「ベター３分の２」[7]である妻の、狭量で偏屈な判断には負けてしまうのです。奇妙に思えるかもしれませんが、30歳を超えて信者になった場合、キリスト教徒の夫の影響が、将来において、非キリスト教徒の伴侶の影響と同じになるかもしれないのに、教育を受けてみるからに霊的に強い若者が、４分の１、つまりうわべだけ教養のある妻から強い影響を受けることになるのです。頭脳明晰で先見の明がある若者たちの中には、すでにこのことに気づいており、結婚する際に、女性の影響力に抵抗できないと自白するものがいます。

私の包み隠しない話をお許し下さい。しかしながら、新島夫人の実例を挙げ、その影響をお伝えすることによって、今この最も重大な時に、女学校のために最善を尽くす必要があることを分かって頂ければと切に祈ります。生

徒たちが「健全な教義」に耳を傾けなくなる時が来るまでに、手を打たねばならないのです。

私の「ひと言」は、長いひと言になりました。どうかお許し下さい。私たちの家にいる幽霊についてもちゃんと押し入れの中にいて歩き回らなければ書くつもりはありませんでした。私にとって姉妹である新島夫人とその母親二人のことを、これまでそんなに悪く思っていなかったし、過去には高い希望や期待を抱いていた二人のことをこんな風に書くことがどれほど耐え難い苦しみであるか神様はお分かりでしょう。以前に学内で、外国人はデイヴィス夫人[8]と私の二人だけの時に、多くの「良い影響」を与えて下さるだろうと、この二人の婦人とその姪たち[9]をどれ程頼りにしていたかを、お話したことがありました。よくあることですが、恵みとなるだろうと予想していたことが、実際には唯一の心を痛ませる試練となってしまったのです。私は、聖書の中でイエス様の言葉を羨んで、その言葉尻を捉えて誘惑しようとするパリサイ人[10]独特の誘惑の話に、共通点を見つけ出さずにはいられません。二人の女性は、機会あるごとに、秘かに気付かない内に、私たちの言葉や教えの粗探しばかりしているのです。

申し上げるまでもなく、あなた様にこの様な事態について書くことは、崩れやすい危険な道を歩んでいることになると十分に承知しています。が、その問題を最も慎重に扱うためにあなた様の最高の判断に最大の信頼を抱いております。この二人の女性は自分たちの言動が少しでも問題視されていると分かれば、怒りを抑えることは出来ないでしょうし、生徒たちも同じ気持にさせることになってしまいます。そういうことをしなければ、生徒たちはキリスト教の感化の下ですぐにその精神を学び、私たちの提案を喜んで受け入れてくれるのです。もう１通別の便箋で何らかの救済法を提案させていただきます。たとえ成功するチャンスは僅かであっても。　敬具

A. J. スタークウェザー

追伸　今朝の祈祷会では、女生徒全員がボードに対して心からの感謝の祈りをしました。彼女たちは「よろしう」と言っています。A. Y. デイヴィスが来てくれたことに対し、神のみ名を賛美致します。

1.「詩篇」16：6 参照。
2. 山崎為徳の妹、山崎春野と考えられる。彼女は為徳の異母妹であるが、明治12年13才の時、兄為徳に連れられて故郷水澤から上洛して、同志社女学校に入学した。明治17年英語科を卒業、のち、女学校教頭の中島末治と結婚した。
3. 原文では‘a skeleton in every cupboard’（英では‘cupboard’、一般には‘closet’）となっているが、「家の中を歩き回る」とすれば、幽霊の方がイメージし易いであろう。意味は、「（外聞を憚る）家庭内の秘密」「内輪の恥」である。『研究社　新英和大事典』（第 5 版 1980年）では、この表現には「何一つ苦労の種がないと考えられた婦人が、実は毎夜戸棚の中の骸骨にキスをするように夫から強いられていた」という話が出処として紹介されている。
4. 同志社女学校がキリスト教主義であることに対する京都府知事の嫌がらせのこと。
5. 八重の母、山本佐久のこと。寮生45名収容の校舎は建ったものの、パーミリーの京都在住許可が下りないので、臨時に京都ホームの寮母を勤めていた。
6.「詩篇」13参照。
7. 妻のことを普通はベターハーフというのに掛けて、日本の妻の権力をこのように表現したのであろう。
8. J. D. デイヴィスの最初の妻、Sophia のこと。京都に定住する宣教師第 1 号として、デイヴィス一家が入洛したのが1875年10月、その半年後1876年 4 月にスタークウェザーも京都に来た。私塾としての京都ホームが開始したのは、デイヴィス一家の住んでいた柳原前光邸であったが、異国、とりわけ封建色の強い内陸部での生活になじむまでは、二人は新島八重や山本佐久にどれほど頼っていたかを思い出している。
9. 山本覚馬の長女峰と次女久栄のこと。
10. 聖書の中で、パリサイ派の人たちは律法に関する質問をしては、イエスの言葉の揚足を取ろうと躍起となった。八重と佐久をパリサイ派の人になぞらえている。

〈235/2〉【吉岡弘子 訳】

京都　1882年2月5日

親愛なるクラーク博士

京都の女学校は、本国アメリカの伝道局およびクリスチャンの方々のご尽力により設立されましたが、その方々が本校にどんな意向と希望を持っておられるか新島氏に明確に伝える必要があると思います。つきましては、その最善の方法についてあなた様のご判断を仰ぎたく存じます。個人的には、新島氏に対しては今さら念を押して言う必要がないことは、重々承知していますが。

しかし4年間仕事をしてきて、ボードが当初考えていた計画がどこまで達成されているかを確認し、何よりも重要なその目的をこの地の人々に熟知していただくことを、新島氏にお願いするのは理にかなったことでしょう。新島氏はこの京都の地で続けていく仕事について常に高い理想を持っておられ、その理想を語られる時はいつも涙ぐまれるのです。

そこで仕事をする上で、本校の真の目的がきちんと理解されているか、何か妨害になるものがないか見定めるため、たとえば、以下のようなことを新島氏に確認してはいかがでしょうか。

1. クリスチャン・ホームスクールがこれまで世界の女性のために何をしてきたか、そして、総じてアメリカのクリスチャンの切なる願いは、自国で認可されているのと同じキリスト教式教育法[1]で、日本にも同じ恵みをもたらすことである。
2. そのため、アメリカのこのような学校で訓練を受けた信頼ある女性宣教師が、日本の女学生にも同じキリスト教の感化をもたらせるよう、愛をもって派遣されていること。
3. さらに本国からの資金や労力が提供されているのだから、彼女ら女性宣教師の願いや判断が十二分に尊重されて、行動に移されるべきこと。ただし彼女らは日本のステーションやミッションのもとで働いているとい

うことを常に認識した上で、でありますが。

4. 日本に派遣されている宣教師たちは高いレベルの教育の必要性を感じており、その教育を与えうる人物でもあるので、そのために必要なキリスト教の文化や感化力を学校の内外で伝えることが、明確に且つ積極的に認められ、敬意をもって迎えられるべきこと。

どうか最高のホームスクールには全て、キリスト教教育の大切さが付随していることを力説してください。女性宣教師たちが仕事をする際、キリスト教的やり方や手段については、あなた自身が彼女たちの判断を尊重していることを強調して下さい。（私たちの「教育法」は決して変わったものではなく、本国アメリカでもっとも推奨されているものであり、神戸・横浜・東京など日本中のミッションスクールで全く自由に採用され成功を収めているのです。しかし、ここ京都では宣教師が自らの判断で広範囲にわたってキリスト教教育を行おうとしても、その正当性が問題視されるのです。）

どうか、今この初期の段階で致命的な過ちを起こさないために、キリスト教とその文化を伝える際の必要条件に関しては、私たち宣教師の判断が最も正当なものと認識されるべきことを、新島氏に（他の人のためにも）今一度思い起こしていただくようお計らいください。（現在、例の二人の女性［新島八重と山本佐久］は、宣教師は聖書と英語や音楽を適度に教えていればいいと思っており、彼女らこそが教師であって、必要なものを判断するのは自分たちと位置づけています。—年齢が30代と70代の二人の改宗者[2]です。—かわいそうに彼女たち二人は、士族という身分や自尊心から心を閉ざしており、ほかの地の婦人たちなら喜んで受け入れている宣教師の助言を受け付けようとしません。）しかし、私はこれ以上この痛ましく多岐にわたる問題について話すことはやめておきます。話せばそれだけで小説一章分を要する問題ですから。

5. 私はあえて次のことを提案いたします。もし神戸や東京で享受されてい

るキリスト教文化を、この京都の地で自由に活動して広めることができないのであれば（私はそうすべきと確信していますが）、ボードは外国人教師の支援全てから手を引くことを認可し、校舎を京都府に売却して府が使用するのが良いと考えるべきだと。

思い起こしてもみてください。京都府ではすでに公立学校で英語と漢文をきちんと教えており、「クリスチャン・スクール」が提供するキリスト教文化の拡大と育成のために我々宣教師に最大の自由が確保されないのであれば、その学校をサポートしない方が賢明なのです。あなた様には私が繰り返し申し上げる、この切迫感はご理解いただけないかと思いますが、これはミッションにおける最も賢明で確実なる行動を必要とする緊急の問題であると信じております。祈りと共にこの手紙をお送りし、あなた様のご配慮にお委ねいたします。より善き日の夜明けを待ち望んでおります。　敬具

アリス・J・スタークウェザー

1. アメリカで代表的なキリスト教女子教育のモデルはマウントホリヨークセミナリーの方式であった。全寮制で、女性に時間と金銭の管理能力と自己犠牲を教えた。
2. 新島八重の受洗は1876年１月２日で、京都では最初のプロテスタントによる洗礼であった。授洗者は J. D. デイヴィス、その時八重は32歳。山本佐久の受洗は1876年12月３日で、授洗者は新島襄であった。授洗時の佐久の年齢は68歳。この時点での年齢は、それぞれプラス６歳である。

《431》【小林弘美 訳】

マサチューセッツ州ボストンにて、1882年３月９日、アリス・J・スタークウェザー宛

拝復

２月５日付のお手紙が届きました。加えて、前日に書いて下さった宣教師

の年齢と資格に関して、さらに京都の女学校で経験している特別難儀な問題に関して、あなたの見解を述べた長い手紙も受け取りました。ラーネッドさんにその事について手紙を書いたところです。すでにゴードンさんには、京都ホームの管理監督全般を行なうための理事を任命してもらう重要性について書き送っています。理事となる人は、性格上広範囲にわたって諮問の出来る人であり、宣教師が必要不可欠だと思う改革を遂行するときに、その認可と支援を求めることが出来る人たちです。

今回の事例は、明白に、今悩んでおられるあの難儀な問題からあなたが解放されること、京都の女学校は完全にキリスト教を基盤に置かねばならないこと、そして、あなた方女性宣教師には、最も賢明且つ最善の方法で、キリスト教の感化を及ぼしたいと願うあらゆる機会を与えるべきと信じて疑いません。

この手紙と同じ便で、ちょうど刷り上ったばかりの新しいマニュアルをお送りします。異国で仕事に携わる女性宣教師のための義務や特権、ミッションとボードとの関係を明確に定めたマニュアルです。このマニュアルがあり、それを視野に入れて、女性宣教師が確保すべき徹底したキリスト教教育の機会を心に留める理事がいてくれたら、きっと宣教師たちの仕事はもっと遂行しやすくなるだろうと思います。確かに言えることは、あなたがスパイ行為まがいのものや、あなた自身やあなたの努力に対する不信や疑惑に身をさらすべきではない、ということです。こんな目にあう位なら、女学校を完全に見捨てて、他の基準で新しい出発をするほうがいいのです。しかし提案された計画は近いうちに実を結び、いずれ仕事に遣り甲斐を見出すようになるでしょう。

［A.Y.］デイヴィスさんには京都に来ることを快諾し、女学校で働き始めて下さったことに感謝の気持ちをお伝えください。そしてパーミリーさんにはお辞めにならざるを得ないのは遺憾ですが、ご同情申し上げますとお伝えください。きっと少しの間お休みになれば、すぐに本来の元気な姿に戻ら

れるだろうと願っています。

ボールドウィンさんに関しては、外国へ出て行くだけの体力が実際無いのではないかと少し心配しています。彼女はかつて神経過敏症に苦しんでいました。まだ完全に回復していないようです。従って彼女を送り出すことに不安を覚えます。この４、５ヶ月間は十分に健康管理をするように厳しく命じています。それで当分は日本に行く問題は未決にしておきます。彼女の年齢とその他の経験はあなた方のお望み通りなのですが…。　敬具

N. G. クラーク